一八八〇年代末における独英関係

――バッテンベルク、アルバート・エドワード、モリアーを中心に――

飯田洋介

はじめに

一八八〇年代後半、当時のヨーロッパ情勢においてドイツ帝国は苦しい立場に立たされていた。ドイツの西側では、普仏（独仏）戦争によって生み出されたドイツへの復讐心がブーランジズムによって刺激され、独仏関係が一気に緊迫したものとなってしまった。他方ドイツの東側では、一八八五年九月の東ルメリア蜂起とそれに伴うブルガリアとの合併をめぐって、ドイツのパートナーであったオーストリア・ハンガリーとロシアが衝突し、結果的には、これら三国の間で結ばれていた―ドイツの安全保障を確保する上で欠かすことの出来ない―第二次三帝協定（一八八一年成立）が崩壊する事態に直面してしまったのである。東西双方からの危機に直面したドイツ帝国宰相ビスマルク Otto von Bismarck（一八一五―一八九八）は、三帝協定の更新を断念、ロシアとの関係を最優先して一八八七年六月に再保障条約を締結した。その一方で彼は同じ年に、オーストリア・ハンガリー、イタリアとの三国同盟を更新、さらにはこれら二つの同盟国とイギリスとの間に地中海協定を成立させるなど、「ビスマルク体制」とも称せられるような複雑な同盟システムを構築することに成功したのである。

ところが、ここでビスマルクの誤算が生じた。再保障条約を締結したにもかかわらず、彼が露仏同盟を阻止する上でも最も重視していたロシアとの関係が、関税競争といった内政的要因で好転どころか逆に悪化の一途を辿ってしまっ

たのである。[1] その結果、ロシアとフランスを同時に相手にする二正面戦争という最悪な事態に備えるためにも、ドイツにとってイギリスとの関係は一層重要なものとなっていった。そして大半の先行研究が主張するように、第二次地中海協定成立後の一八八〇年代末、このときの独英関係はそれまで以上に友好的かつ密接なものとなっていった。一八八八年には親英派で知られたフリードリヒ三世 Friedrich III.（一八三一―一八八八）が、わずか九九日間ではあったが帝位にあり、一八八九年初めにはビスマルクが秘密同盟ではなく、議会の承認を得た独英同盟を提唱するに至っている。先行研究ではこの点を強調する傾向が古くから存在し、その中にはこの時期を「ベルリン・ロンドン間の密接で信頼のある関係の頂点」と位置付けるものもあれば、[2] ビスマルクはロシアを見限ってイギリスと本気で手を組もうとした、あるいは組まざるを得なかったとして、イギリスへの「方向転換」を主張するものまである。[3]

しかし、こうした見方に筆者は違和感を覚えている。議会の承認というイギリス側が呑みづらい条件を提示して、果たしてビスマルクは本気でイギリスと同盟を結ぼうとしていたのか。保守連帯という意味合いからも最優先してきたロシアとの対決姿勢を鮮明に打ち出せるほど、イギリスに信頼感を見出していたのか。そもそも、そういった同盟提案が、先行研究が口をそろえて唱えているような、地中海協定成立後の独英間の友好的なムードの中でなされたものなのか。ここに、先行研究において未だに意見の一致を見ない一八八九年一月の独英同盟提案に関する問題点を考える一つの手がかりとして、地中海協定成立後から独英同盟提案までの時期、いわゆる「三皇帝の年」と称される一八八八年という年を再考する必要性が生じてくるのである。

それに際して、本稿では以下に挙げる三人の人物に特に注目したい。その三人とは、一八八八年当時、ブルガリア侯を退いていたアレクサンダー・フォン・バッテンベルク Alexander von Battenberg（一八五七―一八九三）、当時のイギリス皇太子アルバート・エドワード Albert Edward（後のエドワード七世、一八四一―一九一〇）、そして当時のペテルブルク駐在英大使サー・ロバート・モリアー Sir Robert Burnet David Morier（一八二六―一八九三）である。一八八八年、彼らを巻き込んだ三つの問題が立て続けに発生し、時には独英両国間のプレス闘争を引き起してしまう。そして、そのときのビスマルクの親露反英的言動を考慮すると、先行研究が提示しがちな、当時の独英関係に対する良好なイメージに対して疑問が生じるのである。

それでは、これまでの先行研究はこの点を無視して当時

の独英関係を論じてきたのであろうか。そうではない。実際、この時期のバッテンベルク問題に関しては、ドイツ第二帝政期外交史料集に関連史料が収録され[4]、比較的早い時期から研究がなされている[5]。但し、これらは往々にして同盟システム完成後のエピソードの一つとして語られがちであり、モノグラフも含めてそれがビスマルク外交全体に与えた影響にまでは考察が及んでいない。一方、普仏（独仏）戦争中にモリアーがフランス軍にプロイセン軍の情報を流したという疑惑に端を発する一八八八年末のモリアー事件に関しては、バッテンベルク問題とは対照的にそれに言及するモノグラフや概説書の数が一気に減り[6]、アルバート・エドワードの一八八八年秋のヴィーン訪問の影響に至っては、研究はおろか概説的言及さえも皆無に近いのである[7]。

そこで本稿では、右記のような研究状況を受けて、バッテンベルク問題、さらには、必ずしも十分に解明されているとは言いがたいアルバート・エドワードのヴィーン訪問問題とモリアー事件を、未公刊史料を主に用いつつ実証的に明らかにすることを第一の課題とする。ここで用いる未公刊史料は、ドイツ外務省文書館[8]及びイギリス国立公文書館[9]に所蔵されている外交文書に加え、ハットフィールド・ハウスのソールズベリ家私設文書館に保管されている当時の英首相ソールズベリ侯 Robert Gascoyne-Cecil, 3rd Marquess of Salisbury（一八三〇―一九〇三）のプライヴェート文書、さらにはオックスフォード大学ベルリオル・カレッジ図書館に保管されているモリアーのプライヴェート文書である。そして、本稿で得られた結果を受けて、それぞれの問題が当時の独英関係にどのような影響を与えたのか、その点を考察するのが本稿の第二の課題となる。

一　アレクサンダー・フォン・バッテンベルク
―バッテンベルクの結婚問題と「宰相危機」―

アレクサンダー・フォン・バッテンベルクは、ヘッセン大公ルートヴィヒ三世 Ludwig III.（一八〇六―一八七七）の甥にして、ロシア皇帝アレクサンドル二世 Aleksandr II（一八一八―一八八一）の后マリヤ・アレクサンドロヴナ Mariia Aleksandrovna（一八二四―一八八〇）を叔母にもつ人物であった。一八七八年六／七月のベルリン会議においてオスマン帝国の宗主権下でブルガリア侯国が成立すると、その翌年に彼が初代ブルガリア侯に選ばれた。その理由は、先に見た彼の血統だけではなかった。バッテンベルクは、一八七七／七八年の露土戦争にロシア軍将校として参戦しており、そのことがブルガリアにおいて人気と信頼感を生み出していたのである[10]。しかし、ブルガリア侯

としてのバッテンベルクは、国内での自由主義勢力との対立から、確固とした支持基盤を有しておらず、非常に不安定な立場にあった。それを克服するために、彼は一八八一年五月にクーデタを起こし、ロシア人を閣僚に登用して独裁制を敷いた。ところが、こうした「ロシアを利用した形で成立した独裁」[11]も、陸軍や鉄道敷設問題をめぐるロシア人閣僚との対立、さらにはロシアの要望を無視するようなバッテンベルクの政策の故に、一八八三年には崩壊してしまう。こうした反露的なバッテンベルクに対するロシア側の怒りが頂点に達したのは、一八八五年九月に東ルメリア蜂起が勃発し、それに伴って東ルメリア自治州とブルガリアの統一が宣言されたときであった。このときの動きをロシア側はバッテンベルクから事前に何も聞かされていなかったのである。また、反露的な人物の下での統一はロシアにとって望ましからざるものであった。ツァーリ、アレクサンドル三世 Aleksandr III（一八四五―一八九四）はブルガリアに滞在させていたロシア人将校並びに軍事顧問全員を本国に呼び戻し、バッテンベルクを支持しない姿勢を鮮明に打ち出した。両者のこうした対立は、ブルガリア・セルビア戦争後の一八八六年八月、ブルガリアにおいて親露派によるクーデタとバッテンベルクの拉致事件を呼び起こした。このときバッテンベルクはロシアの支持を再び得ることがかなわず、ブルガリア侯の退位へと追い込まれてしまったのである。

私人としてダルムシュタットに退いたバッテンベルクを巻き込んだ一八八八年三／四月の問題とは、彼と新帝フリードリヒ三世の皇女ヴィクトリア Viktoria（一八六六―一九二九）との結婚問題の再浮上と、それに伴う帝国宰相ビスマルクの辞任騒動であった。四月五日付の『ケルン新聞』(„Kölnische Zeitung“) には、次のような記事が掲載された。「当地の外交界において一大パニックが起きている。ビスマルク侯が近々辞任するのではないかということが深刻な調子で取沙汰されており、そしてそれは、既に何度も浮かんでは消えていったアレクサンダー・フォン・バッテンベルク公とプロイセンのヴィクトリア皇女の結婚計画と結びついているのだ。信頼できる筋からの情報では、アレクサンダー公は既に求婚目的でまもなく当地へ来るつもりであり、イギリスのヴィクトリア女王が、愛娘の義兄[12]の仲人になるために、フィレンツェから帰途の途中、ダルムシュタット経由で当地に立ち寄るつもりであるという」[13]。

バッテンベルクとヴィクトリアの結婚問題の発端は一八八三年に遡る。当時ブルガリア侯であったバッテンベルクは、国内基盤の不安定さの故に、外交的支援を求めてベルリンを訪問した。そのときに彼女と知り合ったのである。

彼女の母親であるヴィクトリア妃 Victoria（一八四〇―一九〇一）の支持を得て、両者の結婚の話は現実味を帯びていったが、ロシアとの関係を最重視するビスマルクの猛反対によって、翌八四年に立消えになってしまった。[14] 一度決着がついたこの話が、何故一八八八年春に再び浮上したのであろうか。その理由の一つは、皇后となったヴィクトリアが、依然としてバッテンベルクと自分の愛娘ヴィクトリアの結婚を諦めていなかったことである。アイクやプフランツェも指摘するように、彼女の判断は、一八八三／八四年のときもそうであったが、政治的判断というよりも娘の幸せを願う一人の母親の気持ちから生じていたといえよう。[15] 当時はバッテンベルクの政治的立場を考慮して退いたが、今回はバッテンベルクがブルガリア侯を退位しており、しかも自分の夫が皇帝に即位したこともあって、両者の結婚が実現可能のように思えたのである。そして考えられるもう一つの理由は、恐らくこれは彼女の考えとは無関係なのであろうが、フリードリヒ三世がブルガリアを追われたバッテンベルクに勲章のみならず、軍職を与えようと考え、四月二日にベルリン・シャルロッテンブルクに彼を招こうとしていたことである。この二つのファクターがビスマルクの元でつながったとき、先ほど見た『ケルン新聞』の記事へと至ったのである。しかもここから窺えるように、攻撃の矛先はイギリスのヴィクトリア女王 Victoria（一八一九―一九〇一）にも及び、ドイツ国内のみならずロンドンにも衝撃が走った。[16]

果たしてビスマルクは、この記事が示すように、このとき本気で辞職を考えていたのであろうか。これについては当時から否定的な見解が強く、ビスマルクは自らいわゆる「宰相危機」を演出したのだという指摘が各方面からなされていた。[17] では、何故彼はそこまでの大騒ぎを演出し、しかも地中海協定成立後良好であった独英関係を危険にさらしてまで、バッテンベルクの結婚問題のみならず、彼のベルリン訪問を中止させようと躍起になったのであろうか。我々はその答えを、一八八八年四月三日付のフリードリヒ三世宛直奏報告の中で見て取ることができる。[18] それによるとビスマルクは、ある種の状況下ではバッテンベルクの政治的役割は終わっていないため、彼への接近は大きな反作用を呼び起こしかねないと危惧していた。すなわち、ブルガリアで軍事騒擾が起こった場合には、ブルガリアの軍隊がバッテンベルクを再び指導者の座につける可能性があるし、また、墺露戦争が勃発すれば新たに作られるポーランド王候補の一人となることも予想されるから、ツァーリはホーエンツォレルン家がバッテンベルクへ接近すれば、ドイツの対ロシア政策の誠実さと平和志向とに疑念を抱くで

あろう、と皇帝に進言したのである。さらにその翌日には、バッテンベルクの招待はまさしく「反露的デモンストレーション」であり、イギリスの影響を受けてドイツが平和政策を変更したと見られてしまうであろうとフリードリヒ三世の注意を促し、バッテンベルクのベルリン訪問を中止させるよう要請している。[19] その一方でビスマルクは、ペテルブルク駐在独大使シュヴァイニッツ Hans Lothar von Schweinitz（一八二二―一九〇一）にも同様のことを伝えてロシア側の反応を探るよう指示し、またロンドン駐在独大使ハッツフェルト Paul von Hatzfeldt-Wildenburg（一八三一―一九〇一）に対しては、バッテンベルクの結婚が実現すれば、独露関係を維持するためにさらなる親露政策を取らざるをえなくなるとして、首相ソールズベリを牽制すると同時にイギリスの出方を探らせたのであった。[20]

ここから明らかなように、このときのビスマルクの行動は、アレクサンドル三世が嫌悪の対象としているバッテンベルクへの接近が「反露的デモンストレーション」として見られることを恐れての対応であった。先述の如く、一八八〇年代末の独露関係は再保障条約を締結したにもかかわらず悪化の一途を辿っていったために、たとえブルガリア侯を退位したとしても、バッテンベルクの如き「厚かましいがっつき屋」(ein so dreister Streber)[21] にこれ以上独露関係を刺激されたくないというのが老宰相の本音であろう。そしてそれをロシアに対して大々的にアピールする上で、また一八八三／八四年のときの経緯もあって、結婚計画を完全に挫折せしめるためにヴィクトリア皇后のみならず、ヴィクトリア女王をも巻き込んだプレス戦略に打って出たのであった。

それでは、イギリスをも巻き込んだこの大騒動によって、ビスマルクは思うような成果を挙げることができたのであろうか。国内では「然り」といえよう。ビスマルクの脅迫じみた説得によってバッテンベルクのベルリン訪問は取りやめられた。さらに、結婚計画の一番の推進者であったヴィクトリア皇后を「改心」させるのみならず、[22] また、ヴィクトリア女王からもこの結婚に反対である旨確認をとることが出来た。[23] しかもこの一件によって、新皇帝夫妻にビスマルクの存在感を知らしめ、老宰相の協力がどうしても必要であることを彼らに再認識させることになったのである。

しかし、国外ではそうはいかなかった。ビスマルクは国内で事態を有利に進めるためにも、自身の見解に賛同するような返事を恐らくはロシアから受け取りたかったのであろう。[24] だが、実際には彼の期待は大きく裏切られた。ロシア外相ギールス Nikolai Karlovich Girs（一八二〇―一八九五）は、バッテンベルクの訪問に対して次のようにシュ

ヴァイニッツに述べている。「世論ではこの〔バッテンベルクのベルリン〕訪問が起こってしまった場合、それは誤ったものであり、かつ好意的でないように解釈されるでしょう。しかしながら、もしそれが起こってしまった場合、わが国はそれを遺憾に思うでしょうが、フリードリヒ皇帝と同様帝国宰相もロシアに対する友好政策を変更せず、アレクサンダー公のブルガリアにおける政権を認めないことに関して、我々との協定に忠実であり続けるであろう、と確信を持ち続けることでしょう」と。[25] さらに本稿のテーマである独英関係という点で見た場合、ソールズベリの反応も、ギールスの反応と同様にビスマルクの思惑から大きくそれたものであった。彼は、この問題は王室の問題であるから議論することは望ましくないとしつつ、王室に働きかけるといったビスマルクの要請には応じられないという態度を示した。そして、バッテンベルク問題でビスマルクの要望に応えられないためにドイツの協力が得られないのであれば、ドイツの協力抜きでイギリスはやっていかなければならないだろう、としたのである。[26]

このあと、ヴィクトリア女王のベルリン訪問が四月下旬に平和裏に実現し、またバッテンベルクのベルリン訪問が取りやめになったこともあって、事態は沈静化した。しかし、ヴィクトリア女王やソールズベリのドイツへの不信感はこの一件によって根深いものとなってしまった。こうした対独不信の原因ともなったビスマルクのバッテンベルク問題への反応は、プレスを動員した大規模なキャンペーンを展開する必要性に迫られてのことであった。それは、内政上の理由もあるが、[27] むしろロシアからの目を意識してのことであったことは明らかである。但し、必要以上に神経質に、そして過敏に動いてしまったがために、結果的には独英関係に暗い影を落とすことになってしまったのである。

二　アルバート・エドワード
―ヴィルヘルム二世との衝突と独英関係―

一八八八年一〇月初め、喉頭癌で死去したフリードリヒ三世の後を継いで同年六月に即位したヴィルヘルム二世 Wilhelm II.（一八五九―一九四一）とオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ Franz Joseph I.（一八三〇―一九一六）の会談がヴィーンで催された。この会談では何ら政治的に重要な課題は話し合われておらず、その意味では、即位したばかりの若き皇帝による儀礼的訪問という意味合いに留まるはずであった。しかしここにアルバート・エドワード英皇太子が関与したことで、事態は思わぬ方向へ動いていってしまった。

一体何があったのか。アルバート・エドワードはこの会談に先立つ一ヶ月前にヴィーンを訪れ、予定されている独墺二帝会談に参加したいと申し入れたのである。ところが彼の要望は聞き入れられなかった。後日、彼自身が述懐するところによると、彼がヴィーンに到着すると、ヴィーン駐在独大使ロイス公 Heinrich VII. Prinz zu Reuß j.L.（一八二五―一九〇六）、墺皇太子ルードルフ Rudolf（一八五八―一八八九）、さらには墺洪共通外相カールノキ Gustav Kálnoky von Körösptak（一八三二―一八九八）からも、ヴィルヘルム二世が英皇太子の会談への参加を望んでいないことを耳にした。[28] これを受けて、アルバート・エドワードはベルリン駐在英武官スウェイン Colonel Leopold Swaine（?―?）を通じて皇帝に働きかけるよう要請したが奏功せず、ヴィーンでの三者会談は実現せずに終わった。

この背景には、ヴィルヘルム二世のアルバート・エドワードに対する著しい不快感があった。後にビスマルクと対立するヴィルヘルム二世は、若く、そして自尊心の高い人物であった。そんな彼からすれば、即位してドイツ皇帝になったにもかかわらず、自分のことを依然として「甥っ子」扱いするアルバート・エドワードを少なからず快く思わないのは当然のことであった。[29] そんな彼の不快感に拍車をかけたのが、一八八八年夏にアルバート・エドワードが発言したとされる内容であった。それによると彼は、エルザス、北部シュレースヴィヒ、さらにはカンバーランド公の要求に関して譲歩する用意がフリードリヒ三世にあったと発言したというのである。[30] 実際にそのような発言があったか否か確認をとることは出来ないが、[31] ヴィルヘルム二世の英皇太子への不信感の要因の一つにその点があったことは疑いない。

では、ビスマルクはこの事態をどのように見ていたのであろうか。当時外務省審議官であったホルシュタイン Friedrich von Holstein（一八三七―一九〇九）が述べているように、アルバート・エドワードの振舞に帝国宰相は大いに立腹していた。[32] その理由は、大使館ではなく駐在武官を通してベルリンで働きかけようとしたやり方への不満からというよりも、[33] むしろ英皇太子が参加した場合のヴィーンでの会談が反露的な意味合いを帯びた政治的デモンストレーションと見なされてしまうのではないか、という恐れからであった。これは一〇月二日付のハッツフェルト宛訓令の中で明確に見て取れる。[34] この中でビスマルクは自身の見解を以下のように示している。「〔英皇太子の〕訪問それ自体はヨーロッパ、とりわけロシアにおいて政治的な一デモンストレーションとして解釈されえないことが重要であ

る。しかし、ヴィーンでの二帝会談に出席した場合、そのような印象が、英皇太子が〔独墺〕両皇帝陛下とともに第三者として公の場に現れ、閲兵を行い、祝祭を挙行することによって、より完全なものになってしまうであろう。それ故に、三者が一堂に会して現れることは、より政治的な意義を持たせてしまうことになるのである」と。そして「もしイギリスが、オーストリアのようにわが国との間に確固とした同盟を結んでいるのであれば、…この機会に際して英皇太子が〔独墺両皇帝とともに〕現れることは憂慮すべきものではなく、むしろ有益なもので、如何なる場合であれ自然のことであると思うのだが」と続けている。この一節から、ビスマルクがこのとき独英同盟を打診したのではないかと見る説もある。[35] 果たしてこのとき彼が本気で独英同盟を求めていたのか、この問いに肯定的な答えを提出するのは困難であるといわざるを得ない。先に見たハッツフェルト宛訓令を除いて同盟打診に関する史料が独英双方の側で見当たらないからである。さらにこの時期、ビスマルクの側ではイギリスに対する好感よりも反感のほうが強かったと見なすことができる。[36] 一方イギリス側でも、ヴィルヘルム二世の態度にヴィクトリア女王やソールズベリが著しい不快感を示しており、[37] 真に同盟を求める時期としてはタイミングが悪すぎるのである。それらの点を踏まえると、このときのビスマルクのハッツフェルトへの訓令における対英接近を示唆する文言は、王室間のトラブルから独英関係をこれ以上悪化させないようにするためにビスマルクが打った一手と見ることができるのではなかろうか。

イギリス側が政治問題に発展させないよう努めた甲斐もあり、アルバート・エドワードとヴィルヘルム二世との衝突をめぐるこのときの問題は、これ以上発展することはなかった。しかし、時期をほぼ同じくして水面下で展開していた、独英関係を大きく揺さぶるような事件が、一八八八年末に突然表沙汰になったのであった。

三　サー・ロバート・モリアー
―モリアー事件と独英関係の緊迫化―

ペテルブルク駐在英大使サー・ロバート・モリアーは、元来は親独派として知られた人物であった。一八七一年のドイツ帝国成立を肯定的に捉え、またフリードリヒ三世夫妻とも、皇太子のときから親交があった。そのため、一時期ベルリン駐在英大使の人選名簿にその名前を連ねたこともあった。しかし、一八八〇年代後半のソールズベリ政権では、一転して彼の名は親露派の代表格として知られるようになった。その背景には、アフガニスタンに向けられて

いたロシアの矛先をバルカン半島へと転じさせることで英露間の緊張を緩和し、ロシアとの友好関係にイギリス外交の基本路線をおくコースを主張したという事実がある。[38] 彼のこうした言動や、フリードリヒのみならずビスマルクの政敵たちとの交友関係が、ビスマルクの怒りと不満を生み出したのは、誰の目から見ても明らかであった。[39]

そんなモリアーにある容疑がかけられた。それは、普仏（独仏）戦争が始まったばかりの一八七〇年八月、当時ダルムシュタット駐在英公使であったモリアーが、プロイセン軍の移動に関する情報をフランス軍司令官バゼーヌ Achille Bazaine（一八一一―一八八八）に密かに電報で知らせたというものであった。最初にこの件が取沙汰されたのは、バッテンベルク問題で独英関係が少なからず動揺していた一八八八年四月半ば、ビスマルクの長男でドイツ外務長官であったヘルベルト Herbert von Bismarck（一八四九―一九〇四）とベルリン駐在英大使マレット Sir Edward Baldwin Malet（一八三七―一九〇八）の会談の席であった。[40] このときマレットらはこの話を相手にしなかったが、同年七月にロンドンに赴いたヘルベルトがこの話を各方面に触れ回ったために、モリアーの耳にもそれが届いた。[41] 驚愕と怒りを覚えたモリアーは、自らの疑いを晴らそうと、当時マドリードにいたバゼーヌに書簡を送り、そのような事実はないという確認を本人からとりつけた。[42] こうしてモリアーがソールズベリやドイツ政府に対して自らの潔白を証明しようとしていた一方、ドイツ側も、当時のマドリード駐在独大使館付武官ダイネス Adolf von Deines（一八四五―一九一一）がゾルムス公 Prinz Louis Solms（?―?）と共に、情報提供者としてモリアーの名前をバゼーヌ本人の口から聞いたことを確認し、この疑惑が正しいことを裏付けようとしていた。[43]

こうしたバゼーヌの相矛盾する発言をめぐって水面下でやり取りが続いていたのだが、一二月に情勢が急展開した。ビスマルクの政敵ゲフケン Friedrich Heinrich Geffcken（一八三〇―一八九六）の事件[44]との関連で、一二月一六日付の『ケルン新聞』に次のような記事が掲載されたのである。「ゲフケン訴訟をきっかけにして、ドイツ国内の情勢と現在のロシア宮廷におけるイギリス大使との関係を突き止めることが不可欠のものとなった。これを気に、バゼーヌ元帥の発言が話題となったのだが、それによると、彼が一八七〇年八月にドイツ軍のモーゼル渡河の第一報を受け取ったのは、当時ダルムシュタット駐在イギリス公使であったモリアーがロンドン、パリを経由して知らせてきたためであった。…もしこれが事実であれば、すなわち、もし一人のイギリス人外交官がダルムシュタットにおいて一八七

○年にメッツ守備隊指揮官にドイツ軍に関する情報を間接的なやり方で送ったのであれば、世論全体にこれまで知られていなかったことに大いに独特な光を投げかけることになるであろう」。[45] この記事に対してモリアーは『タイムズ』（"The Times"）に反論を発表、[46] ここにモリアーを弾劾する『ケルン新聞』とモリアーを擁護する『タイムズ』の間で激しい論戦が翌一八八九年一月まで繰り広げられた。

モリアー事件が、バゼーヌの発言に端を発するモリアーの軍事情報漏洩疑惑に留まらずにビスマルク親子を巻き込んでの泥沼の様相を呈してしまったのには、もう一つの理由がある。一八八八年末、この論戦と並行してモリアーは『ケルン新聞』の記事を批判し、その反論記事をビスマルクの御用新聞として名高い『北ドイツ一般新聞』（„Norddeutsche Allgemeine Zeitung"）に掲載するよう外務長官ヘルベルトに直に「要求」したが、[47] これに対してヘルベルトは、父親の指示を受けて事務的にモリアーの要求を拒絶した。[48] ドイツ政府が何もしようとしないこと、そしてその後の『ケルン新聞』による攻撃に業を煮やしたモリアーは、自分の無実を訴える最後の手段として、この件に関する自分とヘルベルトとの書簡のやり取りを独断で『タイムズ』に公表したのである。[49] 私的書簡とはいえ無断で公表するモリアーのやり方に、ヘルベルトは激怒した。一八八九年一月五日、ヘルベルトはマレットとの会談の席でモリアーを激しく非難したのだが、ヘルベルトによるとその理由は、モリアーが軍事情報を洩らしたか否かではなく、モリアーのヘルベルトに対する「要求」書簡が内容の点でも文体の点でも無礼極まりないという点にあったとしたのである。[50]

これ以降、モリアー事件の性格が一変した。ビスマルク親子はモリアーを弾劾し続けたが、それは書面上でのモリアーのヘルベルトに対する態度の故であって、当初問題となっていたモリアーの情報漏洩疑惑の故ではなくなってしまったのである。さらに『ケルン新聞』上でのモリアー弾劾も、この頃から一気にトーンダウンしてしまう。その大きな要因は恐らく、一月四日にゲフケンに対して無罪判決が出されたことであろう。[51] 今回の事件がプレス沙汰になったそもそものきっかけは、ゲフケン事件とのかかわりでモリアーの名前が浮上したからであった。ゲフケン宅で押収されたロッゲンバッハ Franz von Roggenbach（一八二五―一九〇七）の書簡の中にモリアーの名前があったのである。しかし、それは一度だけであり、しかもロッゲンバッハがモリアーと会いたがっている旨が記されているだけであった。[52] すなわち、このときのゲフケン事件へのモリアーの関与は立証できず、ビスマルク陣営による「こじつけ」

だったといえるのである。[53] そのため、ゲフケン事件終息後、プレスによるモリアー弾劾も一気に終息に向かっていった。結局のところ、果たしてモリアーが情報をバゼーヌに伝えたか否か、事の真相は相矛盾する発言をしたバゼーヌが一八八八年にこの世を去ってしまったために、分からないままとなってしまった。[54]

何故この時期にビスマルクはモリアー攻撃に踏み切ったのか。それは、バゼーヌにモリアーがプロイセン軍の軍事情報を提供したという報告の裏づけが出揃ったのが一八八八年末であったことがその理由として挙げられる。しかしモリアー攻撃の最たる要因は、もっと別のところに求められよう。この時期、ロシアの関心が中央アジアからブルガリア問題に向けられていたため、モリアーのような英露提携論者がペテルブルクにいることは、悪化の一途を辿っている独露関係をこれ以上悪化させないように腐心していたビスマルクからすれば、決して容認できない事態であった。ドイツ国内の反ビスマルク派にも影響力を持ったモリアーをペテルブルクから追い払うために、ゲフケン事件にかこつけてプレスを動員したモリアー弾劾を行ったのである。

このときビスマルクは独英関係を崩壊させる意図はなかった。英露両国においてもあまり評判のよろしくなかったモリアーへの攻撃は、彼の容疑を裏付けるはずであった証拠を手にしたこともあって、それほど大きな影響を与えないであろうと考えていたに違いない。ところが、プレスを動員して必要以上に騒ぎ立ててしまったために、その結果はまたしてもビスマルクの期待を裏切るものとなってしまった。ロシア側ではこの事件をきっかけに逆にモリアーとの接触を強めていくことになり、[55] また、それまではあまり好感を抱いていなかったソールズベリも彼を解任するどころか逆に留任させ続けたのである。しかも、この事件は『ケルン新聞』と『タイムズ』の論戦を引き起こし、世論の相手国への反感を煽り立てる結果となった。独英関係はバッテンベルク問題と同様に一時的に大きく動揺してしまい、事態を収拾するには何か別の材料が必要とされるほどであったのである。

おわりに――一八八〇年代末の独英関係

以上、一八八〇年代末、とりわけ一八八八年における独英関係を三人の人物とビスマルクの間に展開された事件を通して見てきた。そこから浮かび上がってくるのは、程度の差こそあれ、わずか一年足らずの間に三度も独英間の友好関係を少なからず揺さぶるような事件が発生した（あるいはビスマルクによって引き起こされた）ために、ヴィク

トリア女王をはじめとするイギリス王室のみならず、ソールズベリをはじめとするドイツ寄りのコースを取っているイギリス政府に深い不信感を植え付ける結果となってしまったという事実である。それは、地中海協定が成立したにもかかわらず独英関係が非常に不安定なものとなってしまったということを意味していた。ここから、これまでの先行研究が論じがちであった解釈、すなわち、地中海協定成立後から一八八九年一月の独英同盟打診までの独英関係を友好的な色彩で単線的に捉える解釈が如何に成り立ちがたいかが明らかになろう。

それでは、単線的な理解だからこそこれまで位置づけが比較的容易であった一八八九年一月の独英同盟打診は、上記の文脈に則ると、どのように位置づけなおすことが出来るのであろうか。本稿では紙幅の都合でこれ以上論じることが出来ないが、その点を考察するための一つの鍵が、一八八八年一〇月二日付のハッツフェルト宛訓令に見られた対英接近の姿勢であろう。既に見てきたように、一八八八年秋の時点でビスマルクが突発的に独英同盟打診をほのめかしたのは、英皇太子を独墺二帝会談から締め出したこと、さらにはヴィルヘルム二世との個人的軋轢によって、独英関係をこれ以上悪化させないためにうった形式的な措置であった。八九年初めに独英同盟が打診された状況も、このときのケースと非常によく似ているのである。同様のメカニズムが、すなわち独英関係をこれ以上悪化するのを防ぐ手立てとしての同盟提案という図式が、八九年初めにも該当するのか、それとも一部の先行研究が指摘するように、ビスマルクが本気で独英同盟を求めての行動であったのか。それに関しては別途論じることにする。

註

(1) この点に関しては、一八八七年一一月に成立したロンバート禁止令に関する研究で頻繁かつ詳細に論じられている。ここでは代表的な文献を挙げるに留めたい。Sigrid Kumpf-Korfes, *Bismarcks „Draht nach Russland". Zum Problem der sozial-ökonomischen Hintergründe der russisch-deutschen Entfremdung im Zeitraum von 1878 bis 1891*, Berlin 1968; Hans-Ulrich Wehler, *Das deutsche Kaiserreich 1871-1918*, Göttingen 1973: 大野英二／肥前榮一訳『ドイツ帝国一八七一―一九一八年』未来社 一九八三年; George F. Kennan, *The Decline of Bismarck's European Order. Franco-Russian Relations 1875-1890*, Princeton University Press 1979; 馬越千里「ビスマルク時代末期における独露関係―ロンバルト禁止令の意義とその影響―」『史学』(三田史学会) 五七 (一九八七年)、四七五―五〇五頁。

(2) Ludwig Israël, *England und der Orientalische Drei-*

bund. Eine Studie zur europäischen Außsenpolitik 1887-1896, Diss. phil. (Berlin), Berlin 1936, S.19.

(3) Felix Rachfahl, Zur auswärtigen Politik Bismarcks, in: *Weltwirtschaftliches Archiv* 21 (1925), S.76-134; Hans Herzfeld, *Die moderne Welt 1789-1945,* 2 Bde., 2. neubearbeit. Aufl., Braunschweig 1957, I. Teil, S.238-239; Andreas Hillgruber, *Bismarcks Außenpolitik,* Freiburg 1972, S.193-197. この見方をはじめ、一八八九年一月の独英同盟提案に関しては諸説存在し、未だ定説と呼べるようなものは確立されていない。Vgl. Wolfgang Steglich, Bismarcks englische Bündnissondierungen und Bündnisvorschläge 1887-1889, in: H.Fenske/ W.Reinhard/ E.Schulin (Hrsg.), *Historia Integra. Festschrift für Erich Hassinger zum 70. Geburtstag,* Berlin 1977, S.283-348.

(4) *Die Grosse Politik der europäischen Kabinette 1871-1914. Sammlung der diplomatischen Akten des Auswärtigen Amtes,* 40 Bde., hrsg.v. Johannes Lepsius/ Albrecht Mendelssohn Bartholdy/ Friedrich Thimme, Berlin 1922-1927 (以下 *GP* と略) Bd.6, S.277-298.

(5) バッテンベルク問題に関する研究は、次のように大きく二分できる。①概説的説明(代表例)。William Leonard Langer, *European Alliances and Alignments 1871-1890,* New York ²1950 (1931), pp.482-483; Israël, *a.a.O.*, S.26; Erich Eyck, *Bismarck. Leben und Werk,* 3 Bde., Erlenbach/Zürich 1941-1944: 救仁郷繁他訳『ビスマルク伝』(全八巻) ぺりかん社 一九九三―一九九九年、第八巻(小崎順訳)、九〇―九六頁; Paul Kluke, Bismarck und Salisbury. Ein diplomatisches Duell, in: *Historische Zeitschrift* 175 (1953), S.285-306; Paul M. Kennedy, *The Rise of the Anglo-German Antagonism 1860-1914,* London 1980, p.195; J. Alden Nichols, *The Year of the Three Kaisers. Bismarck and the German Succession 1887-1888,* Urbana/Chicago 1987, pp.206-230; Otto Pflanze, *Bismarck and the Development of Germany,* 3 vols., Princeton/New Jersey 1990, vol.3, pp.282-285; 鹿島守之助『ビスマルクの平和政策』(『日本外交史』別巻一) 鹿島研究所出版会 一九七一(一九三九)年、一二五三―一二五四頁、田中直吉『独逸外交史論』第一巻、立命館出版部 一九四〇年、三一六―三一八頁。②モノグラフ。Egon Caesar Corti, *Alexander von Battenberg. Sein Kampf mit den Zaren und Bismarck,* Wien 1920; Werner Krumbiegel, *Bismarck und der Battenbergische Heiratsplan,* Diss. phil. (Leipzig), Berlin 1936.

(6) アイク『ビスマルク伝』第八巻、一一九―一二一頁、Kluke, a.a.O., S.302; Frederic B.M. Hollyday, "Love Your Enemies! Otherwise Bite Them!". Bismarck, Herbert, and the Morier Affair, 1888-1889, in: *Central European History* 1-1 (1968), pp.56-79; Agatha Ramm, *Sir Robert Morier. Envoy and Ambassador in the Age of*

Imperialism 1876-1893, Oxford 1973, pp.288-394; Pflanze, *op.cit.*, vol.3, pp.304-305.

(7) 管見の限り以下の二点を挙げることが出来る。Israël, *a.a.O.*, S.26; Steglich, a.a.O., S.332-337.

(8) Politisches Archiv des Auswärtigen Amtes, Berlin.（以下PA-AAと略。）

(9) The National Archives, Kew.（以下TNAと略。）

(10) R・J・クランプトン著、高田有現／久原寛子訳『ブルガリアの歴史』（ケンブリッジ版世界各国史）創土社二〇〇四年、二五頁。

(11) 今井淳子「一八八五年ブルガリア公国と東ルメリアの統一」『東欧史研究』一七（一九九四年）、八頁。

(12) アレクサンダーの弟ハインリヒ・モリッツ・フォン・バッテンベルクHeinrich Moritz von Battenberg（一八五八―一八九六）はヴィクトリア女王の末娘ベアトリスBeatrice（一八五七―一九四四）と結婚していた。

(13) „Kölnische Zeitung" vom 5.April 1888 (cf. TNA, FO 64/1186: Malet to Salisbury, No.104, 7 April 1888).

(14) 一八八三／八四年におけるバッテンベルクの結婚問題に関しては以下の文献を参照。拙論「植民地政策開始におけるビスマルクの意図―一八八三―八四年におけるビスマルクの反英政策とアングラ・ペケーナ―」『西洋史学』二〇八（二〇〇三年）、四六―六三頁。Axel T.G. Riehl, *Der „Tanz um den Äquator". Bismarcks anti-englische Kolonialpolitik und die Erwartung des Thronwechsels in Deutschland 1883 bis 1885,* Berlin 1993.

(15) Pflanze, *op.cit.*, vol.3, p.282; アイク『ビスマルク伝』第八巻、九一頁。

(16) ビスマルクは、バッテンベルクのベルリン訪問はヴィクトリア女王によって提案されたものであると見なすなど、この問題へのヴィクトリア女王の関与を常に疑っていた。*GP*, Bd.6, Nr.1330, S.281f.: Bismarck an Schweinitz, Tel. Nr.43, 4.April 1888.

(17) 〔ロシア側〕*GP*, Bd.6, Nr.1329, S.278-281: Schweinitz an Herbert von Bismarck, Privat, Geheim, 5.April 1888.〔ドイツのプレスの反応〕TNA, FO 64/1186: Malet to Salisbury, No.104, 7 April 1888.〔イギリス側〕Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A61/89: Malet to Salisbury, Private, 21 April 1888.

(18) *GP*, Bd.6, Nr.1331, S.282-287: Bismarck an Friedrich III., 3.April 1888.

(19) *GP*, Bd.6, Nr.1332, S.287f.: Bismarck an Friedrich III., 4.April 1888. ベルリン駐在英大使マレットもヴィクトリア女王に対して、バッテンベルクのブルガリア侯復位の可能性を指摘しつつ、同様のことを報告している。Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A61/80: Malet to Queen Victoria, 7 April 1888.

(20) *GP*, Bd.6, Nr.1333, S.289: Bismarck an Hatzfeldt, Tel. Nr.49, 5.April 1888; Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A64/22 (TNA, FO 343/2): Salisbury to Malet, Tel.,

Private & Secret, 6 April 1888.

(21) *GP*, Bd.6, Nr.1336, S.291f.: Bismarck an Schweinitz, Nr.208 Geheim, 8.April 1888.

(22) Krumbiegel, *a.a.O.*, S.51f.

(23) Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A61/83: Ponsonby to Malet, Confidential, 7.April 1888; 3M/A61/81 (TNA, FO 343/2): Malet to Salisbury, Tel., Private & Secret, 9 April 1888.

(24) この点はアイクが指摘するところであり、筆者もそれに異存はない。アイク『ビスマルク伝』第八巻、九五頁。

(25) *GP*, Bd.6, Nr.1334, S.289f.: Schweinitz an Auswärtiges Amt, Tel. Nr.59, 5. April 1888.

(26) Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A64/21 (TNA, FO 343/2): Salisbury to Malet, Tel., Private & Secret, 6.April 1888; 3M/A64/23 (TNA, FO 343/2): Salisbury to Malet, Tel., Private, 8 April 1888. 実際ビスマルクは、バッテンベルク問題とイギリスが抱えるエジプト借款問題を絡めて扱おうとしていた。3M/A61/77 (TNA, FO 343/2): Malet to Salisbury, Tel., Private & Secret, 7 April 1888.

(27) セルビアとの戦争での勝利やブルガリア侯退位までの経緯もあって、当時バッテンベルクはドイツ国内で人気があったため、反対派によって彼が帝国宰相に担ぎ出されるのではないか、とビスマルクは危惧していた。Pflanze, *op.cit.*, vol.3, pp.284-285; アイク『ビスマルク伝』第八巻、九七頁。

(28) George Earle Buckle (ed.), *The Letters of Queen Victoria.* 3rd Series, A Selection from Her Majesty's Correspondence and Journal between the Years 1886 and 1901, 3 vols., London 1930-32（以下 *LQV* と略）vol.1, p. 488: Prince of Wales to Prince Christian of Schleswig-Holstein, 3 April 1889. このときのロイス公の行動は、ベルリンから指示されたものではなかったようである。またルードルフ皇太子とカールハキは、独英関係の悪化につながるのではないかと懸念を示している。Steglich, a.a.O., S.333f.

(29) *LQV*, vol.1, p.439: Memorandum by Salisbury, 13 October 1888; Steglich, a.a.O., S.332f.

(30) Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A61/126 (TNA, FO 343/10): Malet to Salisbury, Private, 29 September 1888. ドイツ側の主張を見ると、アルバート・エドワードはエルザス・ロートリンゲンをフランスに譲り渡すよう発言したとある。

(31) アルバート・エドワードによると、そのようなことは言った覚えはなく、これはヴィルヘルム二世と衝突させようとする「明らかな嘘」だという。*LQV*, vol.1, p.489: Prince of Wales to Prince Christian of Schleswig-Holstein, 3 April 1889.

(32) Paul von Hatzfeldt-Wildenburg, *Botschafter Paul Graf von Hatzfeldt. Nachgelassene Papiere 1838-1901,* 2 Bde, hrsg. u. eingel. von Gerhard Ebel, Boppard 1976,（以下 Hatzfeldt, Papiere と略）Bd.2, Nr.397, S.697f.:

Holstein an Hatzfeldt, 7.Oktober 1888.

(33) Steglich, a.a.O., S.333.

(34) この訓令に関しては、シュテグリッヒ論文の中でその一部が引用されており、またハッツフェルト遺稿集にもその概要が紹介されている。Steglich, a.a.O., S.335; Hatzfeldt, Papiere, Bd.2, S.697f. (Anm.3).

(35) シュテグリッヒがその代表例である。Steglich, a.a.O., S.332-337.

(36) 一八八四年以降、空位になっていたブラウンシュヴァイク公国にかつてのハノーファー王国の王太子カンバーランド公エルンスト・アウグスト Ernst August, Herzog von Cumberland（一八四五―一九二三）を擁立する動きがあり、アルバート・エドワードは彼を支援していた。イギリスの介入の危険性を見出したビスマルク親子はそれに激しく反発していた。Hatzfeldt, *Papiere*, Bd.2, S.698 (Anm.4).

(37) ヴィクトリア女王に至っては、公的な場だけでなく私的な場でも自分たちに「皇帝陛下」と呼ばせようとするヴィルヘルム二世の態度を「完全に狂気の沙汰」(perfect madness!) とし、そのような考えを抱くのであれば、彼は「ここ[イギリス]には来なければ良いのに」とし、ヴィルヘルムの訪英に否定的な見解を示している。*LQV*, vol.1, pp. 440-441: Queen Victoria to Salisbury, 15 October 1888.

(38) Hans Lothar von Schweinitz, *Denkwürdigkeiten des Botschafters General von Schweinitz*, 2 Bde., Berlin 1927（以下 Schweinitz, *Denkwürdigkeiten* と略）, Bd.2, S.380; Kluke, a.a.O., S.299; Ramm, *op.cit.*, p.273; Kennedy, *op. cit.*, p.193.

(39) 「[モリアーは現政権を転覆させることを狙うグループと連絡を取っているが]、そのメンバーの中にはゲフケン、ロッゲンバッハ、シュトッシュ、ローエがいるのです」。Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A62/3 (TNA, FO 343/10): Malet to Salisbury, Private, 17 January 1889.

(40) Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A61/82: Malet to Salisbury, Private & Secret, 14 April 1888.

(41) Balliol College Library (Oxford), Morier Papers, Box 27-2: Morier to Herbert von Bismarck, 19 December 1888.

(42) Ibid., Box 24A-3: Morier à Bazaine, 25 juillet 1888; Bazaine à Morier, 8 août 1888.

(43) Hatfield House, Salisbury Papers, 3M/A61/130: Malet to Salisbury, Private, 8 November 1888; PA-AA, England 81 Nr.2b, Bd.2, R.5951: Aufzeichnung H.v. Bismarcks, 15.November 1888; TNA, FO 64/1211: Prinz Solms an Deines, 4.Dezember 1888 („Norddeutsche Allgemeine Zeiturg" vom 22. Januar 1889).

(44) このときライプツィヒ帝国最高裁判所では、シュトラーブルク大学教授のゲフケンが自身の論文「皇帝フリードリヒの日記から一八七〇／七一」の中でフリードリヒ三世の日記を一部公表したため、機密情報漏洩、国家反逆罪にあたるか、審議中であった。

(45) „Kölnische Zeitung“ vom 16.Dezember 1888 (cf. TNA, FO 64/1189: Malet to Salisbury, 17 December 1888).

(46) “The Times”, 21 December 1888.

(47) Balliol College Library (Oxford), Morier Papers, Box 27-2: Morier to Herbert von Bismarck, 19 December 1888.

(48) PA-AA, England 81, Nr.2b, Bd.2, R.5951: Bismarck an Herbert von Bismarck, Tel.Nr.93, 23. Dezember 1888; Balliol College Library (Oxford), Morier Papers, Box 27-2: Herbert von Bismarck an Morier, 25.Dezember 1888.

(49) Ibid: Morier to Herbert von Bismarck, 31 December 1888; “The Times”, 4 January 1889.

(50) TNA, FO 64/1211: Malet to Salisbury, 5 January 1889.

(51) „National Zeitung” vom 8. Januar 1889 (cf. TNA, FO 64/1211: Malet to Salisbury, No.8, 8 January 1889).

(52) Balliol College Library (Oxford), Morier Papers, Box 2 4A-3: Morier to Salisbury, 20 February 1889.

(53) モリアーはゲフケン事件への関与を否定し、ゲフケンとは一八八五年以来一度も会っていないし手紙も送っていないと報告している。Balliol College Library (Oxford), Morier Papers, Box 27-2: Morier to Salisbury, Tel., Private, 16 January 1889.

(54) 詳しくは以下の文献を参照。Hollyday, op.cit., pp.71-79.

(55) Schweinitz, *Denkwürdigkeiten*, Bd.2, S.374/378.

本稿を執筆するに当たり、利用した文書の閲覧・使用を許可してくださった各文書館のスタッフ、とりわけ Mr. Robin Harcourt-Williams (Hatfield), Dr. Penelope Bulloch (Oxford), Mr. Alan Tadiello (Oxford), Dr. Gerhard Keiper (PA-AA) の方々に、この場を借りて深く御礼申し上げる。